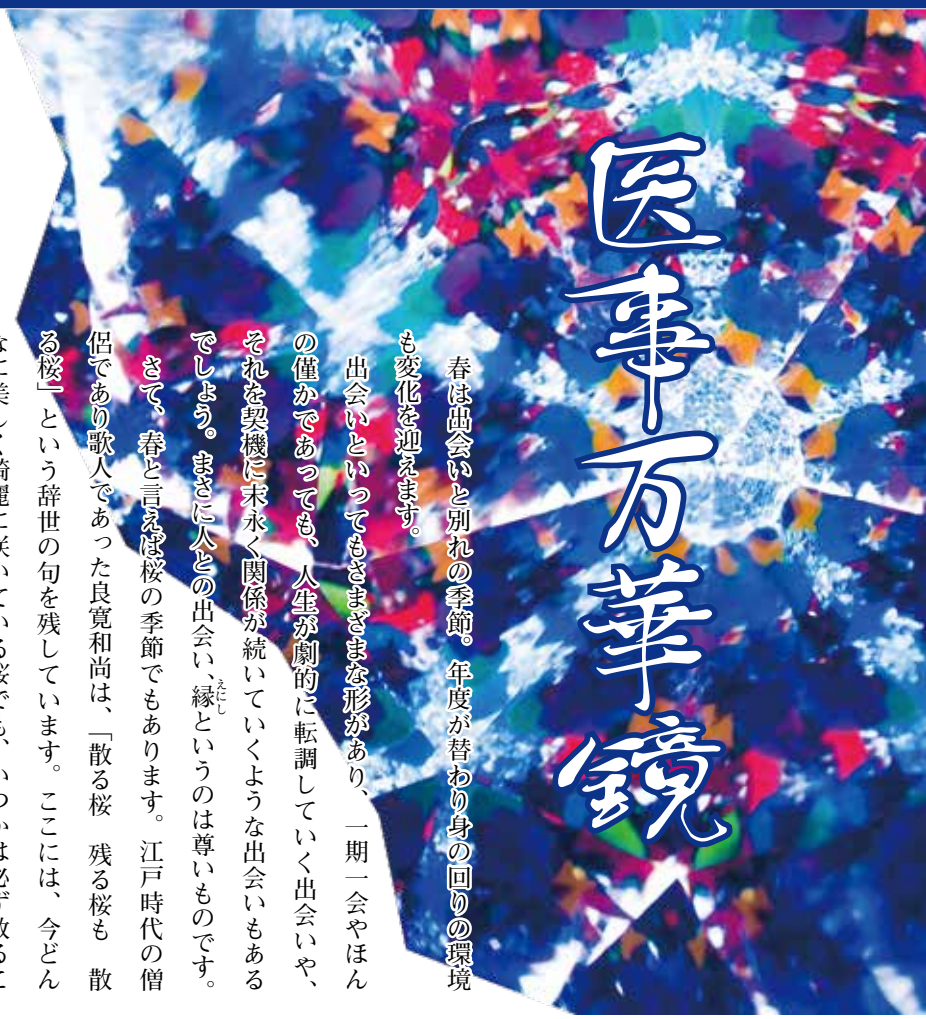
27．カイロスの季節



春は出会いと別れの季節。年度が替わり身の回りの環境も変化を迎えます。

出会いといってもさまざまな形があり、一期一会やほんの僅かであっても、人生が劇的に転調していく出会いや、それを契機に末永く関係が続いていくような出会いもあるでしょう。まさに人との出会い、縁（えにし）というのは尊いものです。

さて、春と言えば桜の季節でもあります。江戸時代の僧侶であり歌人であった良寛和尚は、「散る桜　残る桜も　散る桜」という辞世の句を残しています。ここには、今どんなに美しく綺麗に咲いている桜でも、いつかは必ず散ることを心しておかなければならないとの思いが込められています。まさに、限られた命を大切にするようにとの教訓です。

ただこれを「いのち」だけでなく、何らかの縁によって「出会った人」と置き換えてみたらどうでしょうか。すると、どんなに尊く厚い信頼の内に築き上げられた関係であっても、いずれその人と別れなければならない日が訪れるため、かけがえのない〝今〟を大切にしよう、ということになるでしょう。なるほど、出会いというのは常にひとつの別れを含んでいるということです。

例えば、空気のように傍にいて当然と思える家族や友、仲間たち。しかしそんな彼らともいつかは別れなければなりません。ただ、人は未来を案じてばかりではとても現実を生きてはいられませんから、いつか必ず訪れるであろう別れについては、考えることを避けるのでしょう。現実を生きるということはそういうことです。

ところで、ギリシャ神話にはクロノスとカイロスという「時」を神格化した2つの神が登場します。過去から未来へと続く時間の流れを支配するクロノスに対し、カイロスは前髪だけ長く後頭部が禿げた美少年として表現され、人間の時間の生かし方を支配しています。チャンスやタイミングを表してもいます。いわば、クロノスが客観的な時間を示すのに対し、カイロスは主観（心的体験）的な時間を指しているとのことです。またカイロスは、心理療法では〝治療的転機〟をも表しています。

そんな出会いの本質について、臨床心理学者の故・霜山徳爾氏は、「出会いは私と一致しようとする汝、すなわち己の内面の限界を知りながらもなおあたたかく、私の内面性の闇をこえ、自らの内面性を、いかに貧しく、あるいは無惨であっても、私に開き示そうとする『汝』を発見することの内に存する」という感慨深い言葉を残しています。

出会いと別れの季節。一人ひとりがカイロスとしての素敵な出会いに恵まれることを祈っています。

（ＪＭＳ主幹・野村元久）